

開成棒倒し — 日本一荒々しい団体戦、だが烏合の衆に非ず

一方が自軍の棒を守る。敵はその棒を倒すために全力を尽くす。棒倒しはラグビー、相撲、格闘技の要素を取り入れた競技。危険だと言われながら日本で行われている。



写真 開成学園運動会の棒倒し競技で戦う生徒たち

雲一つない春の午後、一団の若い生徒たちが運動場で大声で怒鳴りながら唸りを挙げて 3.6 ｍの木製の棒を守る敵陣の壁に向かって突撃するのを、何千人もの父母、教師、OBが見守った。攻撃手は敵を押しつけ掻き分けて敵陣に飛び込む。頭で突く。肘で押し分ける。生徒が作る壁はくずれるが、すぐに立て直す。荒海の中の船のマストのように棒は沈んでまた持ち上がる。

これは敵・味方入り乱れての塹壕戦などではなく、棒倒しという競技だ。アメリカンフットボールとラグビーと相撲と格闘技の要素を取り入れた 100 年の歴史ある競技なのだ。このゲームは危険だということで日本の多くの学校ではやらなくなった。だが開成学園では続いている。棒倒しは開成の運動会の重要な目玉種目なのだ。

アメリカで知っている人はほとんどいないが、棒倒しは棒を倒す競技だ。日本で最も有名な高校のひとつである 1871 年創立の開成にあって、棒倒しはずっと通過儀礼として存在するのだ。教師たちは言う。この競技は生徒のチームワーク、タフネス、スポーツマンシップを促進すると。生徒たちは高 2 高 3 になって試合に出て戦うチャンスが来るのを待ち望んでいる。(下級生たちはもっと初歩的な競技を行う) OB たちは何十年も前に戦った試合の細かい部分まで思い出すことが出来る。最近開成を卒業した中川誠が上級生について語った。「中学に入った最初の年から自分はずっと先輩を見てきた。棒倒しは全ての中心的存在だった。伝統です。」



棒倒しを行う防衛大学校の学生 (YouTube)

<https://www.youtube.com/watch?v=mWrdUacpX-w>

弥増す混乱

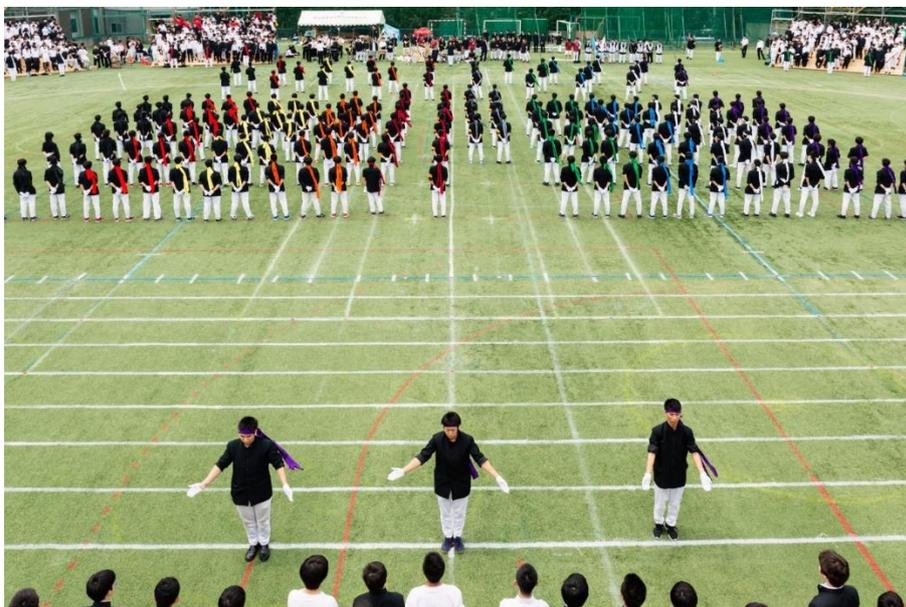
知らない者には棒倒しはぐちゃぐちゃの大混乱に見える。競技場の片側で 20 人余の攻撃手が相手の棒を引き倒そうとする。これに対し 20 余人の守備隊が棒を直立するように守る。

競技場の向こう側には鏡に映ったような対称的な光景が広がる。ただし鏡とちがって向こうに見える攻撃手は 15~6 人離れた守備隊と同じチームの敵であり、向こうの守備隊はこちらの攻撃手のチームメイトなのだ。

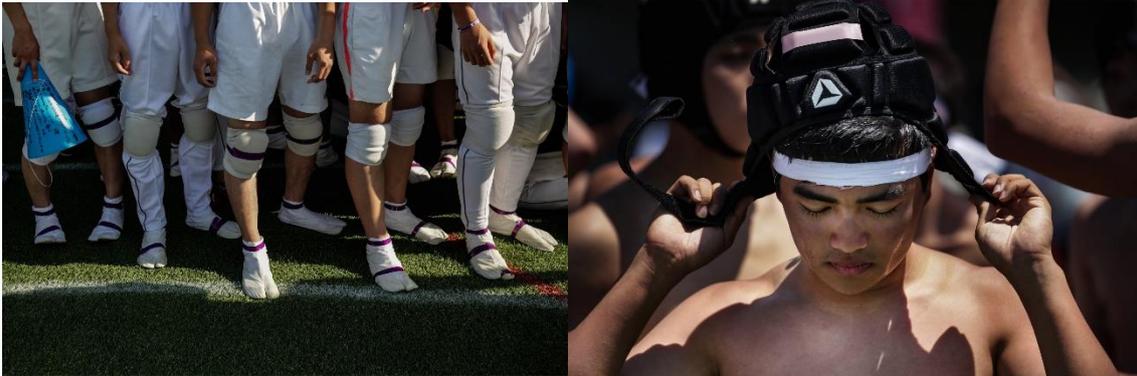
競技は先に、棒の先端を 90 秒以内に地面から 140 c m以下にした方のチームが勝者となる。もしどちらのチームもそれができなかつたら、もう一度初めからやる。二度目も引き分けの場合はくじ引きで決める。

開成では、守備側も攻撃側も頭に色彩豊かな鉢巻きを締めて声を限りに「ガンバレ」とか「負けるな」とか叫んで互いを鼓舞する。

競技に参加する生徒はソフトヘルメット、ニーキャップ、プロテクターのほかにはほとんど防具は付けない。捻挫、キズ、鼻血はよくあることで容認されている。時折生徒は足の骨を骨折したり、頸椎骨折や頬骨骨折を起こす。あるいは脳震盪を起こす。



写真：棒倒しチームと応援団



写真：選手はほとんど防具を付けない

競技の後、生徒はアイスパックを貰ったり包帯を巻いてもらったりするため救護所に詰めかける。

棒倒しでの怪我の件数は近年増加している。同校の記録に寄れば、怪我の件数は、記録入手可能な最近の 2005 年から 2016 年までに 52%跳ね上がった。

件数の増加は怪我の報告体制が整ってきたことにもよるが、運動能力がある生徒とそうでない生徒の差も一因で、棒倒しに参加するが運動ではない方面に興味を持つ生徒数が増えていることにもよる、と同校で永年数学教師を務め運動会のスポークスマンである清水哲男氏は語る。

「運動部に属する生徒と、運動を全くやったことのない文芸・芸術部に属する生徒とがごちゃ混ぜになってやっている」と運動会でボランティアドクターを務める開成OBの松本智司医師は言う「それでも深刻な事故がないことには感心しています」



写真：青組が敵の棒に突進

「真っ向勝負だ」

棒倒しは 1929 年以来開成の運動会の一部となっている。この競技が生れたのはその何年も前のことだが。

東海大学のスポーツ歴史学者、松浪稔氏は言う。棒倒しは 1980 年代に人気があったいくつかの競技を組み合わせたものではないだろうか。たとえば、竿のぼり、旗取り、ロープを上げて一枚の布を掴み取る綱のぼり旗取りのような競技である。

同氏はもうひとつの仮説を述べる。棒倒しは、柱の先端の旗という点を除いては、旗取り、或いは大将取りの一種をモデルにしたものである。その競技は日本の南の県、鹿児島で生徒がやっていたもので、広島海軍兵学校に持ち込まれた。それが多分今でも防衛大学で行われている棒倒しの原型であろう。

昔は条件がもっと荒っぽかった。開成では、競技は通常約 5 分間続き、引き分けの時は何度でも再試合が繰り返された。そのため試合は夜間に及んだ。選手はほとんど防具なし。ルールはわずか 2~3 頁の印刷物だった。



開成運動会の棒倒し(1976年) Michio Saito

「我々にはアメリカンフットボールのような細部にまで気を配ったゲームプランのようなものは無かった」棒倒しで守備をやり鎖骨を骨折した服部明人氏 (S52 卒) が語った。「もっと野蛮でおおざっぱだった」

当時から服部氏の親友で、棒倒しで攻撃手だった曾禰信氏はもっと率直で「ただもう真っ向勝負だった」という。

(防衛大学で行われる棒倒しのやり方はもっと暴力的だ。守備の選手は味方の肩の上に立つ。柱のてっぺんにひとりが座って攻撃してくる敵を蹴るのだ)

1980年代までに、親たちは子供たちがもっと大学入試に集中するように仕向けるようになった。そして棒倒しや人間ピラミッドを含む組体操、闘鶏や騎兵隊バトルに似た騎馬戦は危険すぎると心配するようになった。いろいろな学校がこれらを運動会の種目から外すようになった。

東京の別の有名男子校である麻布学園で、3年前にひとりの生徒が競技中にひどい打撲をうけ救急車で病院に運ばれた。この子は懸念された脊柱損傷には至らなかったが学校は最終的にこの競技を中止することにした。

平秀明校長は「何人かの先生が、もう限界に達しているのではないかと懸念していた」と語った。

競技の安全化

疑問は、ヘリコプターペアレンツと呼ばれる過干渉な親の時代にあって、ほかの多くの学校では中止になっている大問題と言われる競技が開成においてはなぜ存続しているのかということである。

アメリカの少年はフットボール、ホッケー、その他の身体接触のあるスポーツをやっている。だが彼らは防具をまとう。そして、優秀な運動選手は大学の奨学金を得られるということで危険については一部大目に見られている。

これに対し、開成の棒倒しは運動会の時にしか行われず、が運動会は同校の文化の基調をなすものである。生徒たちは運動会のために何カ月も練習をし、計画を練る。

開成OBは言う。裸の肉弾戦で垣根が取れ、絆が生れたと、開成健児すなわち開成生のタフさについて語った。



写真：予行演習中にくつろぐ生徒たち

自身で棒倒しもフットボールもやったことがあるスポーツ歴史学者松浪氏は言う、この競技は無秩序に見えるがチームワークを教え持久力をつける好い方法であると。

「歴史やルールを知らずに N. C. A. A. 設立以前のアメリカンフットボールを見たら多くの人は、これはひどいと思うだろう」彼は言う「それと同じことだ」と。

開成の校長柳沢幸雄氏は棒倒しにリスクがあることを認識している。だが同氏も同校のほかの先生もルールが変更され今ではずっと安全になっているという。

たとえば蹴りは開成では認められていない。競技時間は 1998 年に 2 分から 90 秒に改められた。攻撃手が走って守備隊に達する距離は衝撃の激しさを軽減するため 30 メートルから 10 メートルに短縮された。

生徒の中にはそれでも怪我をするのではないかと心配する者がいる。だが彼らも棒倒しはこの学校で続くと確信している。

「もし重大な事故が起きたら、毎年対策を講じルールを改正する」と今年の優勝チームの組責（組を統率する責任者）である石川龍太君が語った。

懸念を持ちながら親たちはこの競技を受け入れている。「この競技は危険だ。だが、ルールは詳細に決められており毎年見直しが行われているので私は彼らを信頼している」と棒倒しに出陣する息子を仕事を休んで見に来た樋口裕一氏が語った。「息子には、怪我なく帰ってきてほしい」

90 秒の闘いのために数カ月作戦を練る

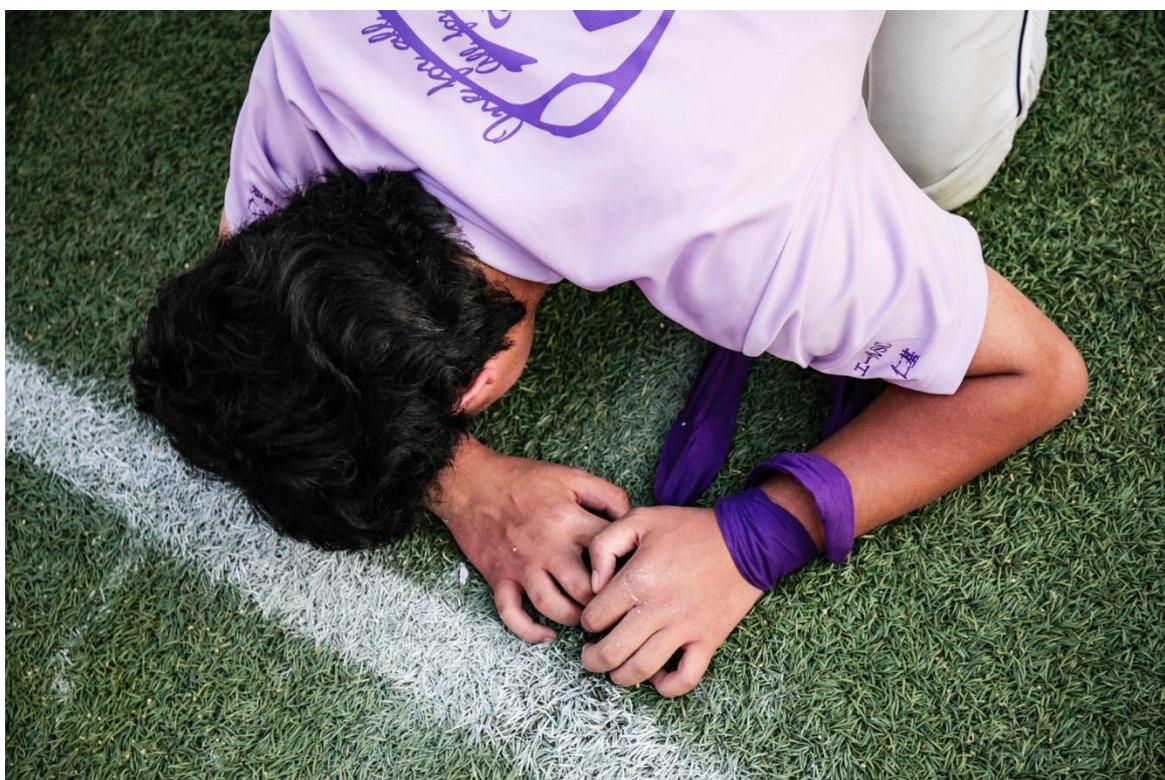
多くの日本の学校とちがって、開成の生徒たちは自分たちで運動会を運営する大幅な自治権を与えられている。数か月間にわたり彼らはこの行事の全計画を立案し、協議のルールを磨き上げ、優勝するための戦略を立てるのだ。こうしてできた運動会のルールブックは日本語の小さなフォントで 124 頁にもなる。「先生たちは自分たちを信頼してくれていて、自分たちのしたいことを自由にさせてくれている。」と高2で審判長の横井総太郎君が語った。しかし、誰かがひどい怪我をした場合には、先生方が介入してくれますと彼は付け加えた。棒倒しは単純な競技である。しかし開成の生徒たちは戦術の構想に多くの時間を費やす。攻撃隊は三つのグループに分けられる。最初の 6 人ほどは敵の守備隊を押しつけては柱までの道を開く。第二波は守備隊を飛び越して柱に飛びつく。第3グループは柱にしがみついた仲間の足を引っ張って柱を倒す。また味方を引きずり落とそうとする敵の守備隊を引きはがす。



写真：棒倒しを観戦する父母



写真：優勝チームに与えられる盾



写真：試合後芝に倒れ伏す紫組の生徒

競技開始の笛が鳴る前に攻撃の第 1 陣がびっしりとスクラムを組んで競技場の中央に進んで行く。これは敵の守備隊に突撃のリーダーが誰であるか分からないようにするためだ。通常このグループには柱に飛びつくチャンスが高い背の高い生徒をえらぶ。

守備軍は同心円の輪を作る。3人は輪になり立って棒を抱く。もう3人は棒の根元を抱える。第3列の守備隊は棒を囲んで内側にいる仲間に背を向けて囲み8人で腕を組む。残りの守備隊は大きな輪になって敵の攻撃隊を撃退する、あるいは柱に到達した敵を引き下ろす。

戦術の大部分は棒に向けて何人の攻撃を、どんな陣形で投入するかに関わる。あるチームは正面攻撃を好む。別のチームは棒の周囲の色々な地点に攻撃を仕掛ける。各チームは自分たちのやったことをビデオに収録する。戦術は秘密にされ、下級生に譲り渡される。

棒倒しの類を見ない特徴のひとつは、攻撃手はフィールドの反対側で味方がどうなっているのかわからず、逆もまた同様である、という点にある。



写真：横井総太郎（主審）が他の審判員と試合中に協議



「僕たちは自分たちの作戦を完璧に実行することだけを考えていて、だから 90 秒の競技時間中は、考えるのではなく、やるべきことをやるだけだった」高3で、ある組の組責であった田久保将人君が語った。

生徒たちは 8 組に分けられ、組ごとに色分けされる。勝者となるには 3 回連続で勝たなくてはならない。今年の興奮の様子はこうだ。OB たちは昔自分たちが競技をした組の栈敷の近くに立つ。父兄は声を張り上げて息子を応援する。下級生は応援団のリードで応援歌を歌う。

応援の声は、攻撃手が敵の棒を倒しはじめ、守備隊が肩入れを始めると熱狂はますます大きくなる。ノリ（棒に乗ることを目指す攻撃手）が守備陣を飛び越えて棒に到達するたびに悲鳴に似た声が聞こえる。そのノリを守備側が剥がすと更なる喝采が送られる。

黄組と紫組の決勝戦では勝負がつかず棒を倒す前に時間切れとなった。審判が地面からの棒の上端までの高さを測り黄色の勝と判定した。優勝は黄組。ヘルメットを空に投げ上げ、歓喜のウィニングラン一周だ。



写真：黄組がほかのチームを破って優勝

取材協力：大沢春美氏